

母親学歴が子どもの学歴に与える影響 ～大学生へのアンケート調査の分析と検討～

新田 司

The Impact of Mother's Educational Background on Their Children's Educational Background

Tsukasa NITTA

子どもが獲得する学歴に、母親の学歴が影響を与える要因になっていることが、近年の研究から明らかになってきている。本稿では、その影響について概観し、さらに大学生に実施したアンケート調査を検討して、母親の学歴が子どものもの学歴に与える影響について考察する。

1. はじめに

日本では1960年から1980年にかけて、高等学校、大学・短期大学の進学率が急激に上昇した。高等学校では1955年時点で51.5%の進学率であったが、1960年には67.7%、1980年には94.2%に達した。大学・短期大学の進学率に関しては、1960年には10.3%であったのが、1980年には37.4%へと、3倍以上の上昇がみられた。大学・短期大学に関してはその後も上昇を続け、1990年代には40%台、2000年代に入ると50%台、そして2011年の現役の進学率は54.8%に達して、半数以上が大学・短期大学に進学することとなった¹。さらに2007年には、大学定員が大学志願者を上回る、いわゆる「大学全入」時代を迎えたといわれ、数字の上で「望めば大学に進学することが可能」となる状況となった。だが、高校を卒業した卒業生の半数弱は大学・短期大学に進学せず、また「全入時代」も迎えた後も、定員を充足していない大学・短期大学が存在する。つまり、高校卒業後に大学や短期大学に進学しない、あるいは進学したくてもできない状況が考えられる。その背景には、経済的、地理的条件などの社会的要因や個々の家庭の問題が想定される。そこで本稿では、大学や短期大学に進学しない要因の一つとして想定される家庭の問題、なかでも子どもに影響を与える要因として近年注目されている母親学歴と子どもの学歴との関係について検討したい。今回は、予備調査として、都内の大学に在籍する大学生に対して、母親学歴とその母親から受けたしつけや関わりを調査し、その学生が自身の母親から受けた影響が母親の学歴と関係するかどうかについて、検討してみたい。

2. 子どもの学歴に影響を与える要因

前節で触れたように、今日、子どもの学歴がどのような要因によって影響を受けるかに関して、さまざまな観点から検討されている。近年では、バブル崩壊後の長期的な経済低迷がもたらした経済的困窮により、子どもに進学を断念させる家庭や子どもが中退せざるをえない家庭が増加しつつある。家庭の経済格差が結果的に「教育格差」を生む要因となり、直接的に子どもの学歴に影響を与えることになる。東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センターが2005年11月、2006年3月に実施した「高校生の進路についての調査」で、親の年収が子どもの大学進学率に差をもたらすことを明らかにしている。この調査によれば、年収400万円以下の家庭での4年制大学進学率が31.4%であるのに対して、1000万円を超える家庭では62.4%に達し、両親の年収が大学進学率に明確な差をもたらすことを示した²。厚生労働省の「国民生活基礎調査」によれば、年収400万円以下の世帯が、2000年には39.4%であったのに対し、2009年には45.2%まで上昇しており³、ここ10年でいっそう格差が拡大した可能性も考えられる。

子どもの学歴は、上記の経済的要因のような外的な要因によって左右されることが考えられるが、一方で子どもが育つ家族の教育意識の影響も見逃せない。1989年の学習指導要領の改訂により「ゆとり教育」がスタートし、子どもたちの「興味・関心・意欲」を重視する「新しい学力観」が導入されて、「自ら学ぶ」意欲や興味・関心の育成を旨とした教育が始まった。荻谷剛彦は、こうした教育が受験競争など外側からの動機づけ（＝インセンティブ）を見えにくくし、むしろ子ども全体の学習意欲の低下をもたらしたとのべたうえで、社会階層が上位グループの子どもたちに関しては、その社会階層のもつ文化的背景により、興味・関心にもとづく新学力観的な学習になじみやすく、「内発的な動機づけ」による学習に取り組める可能性はあるものの、こうした学習を苦手とする階層の子どもは学習についていくことが困難となり、両者の階層間格差はさらに拡大したと分析した。そして、意欲の低下がより顕著になった社会階層の下位グループでは、「学校での成功をあきらめ、現在の生活を楽しもう」という意識転換を図ることで自己肯定感が高まる」こととなり、学習意欲を高めるはずの教育改革は「<降りる>ことによって自己を肯定できる低い階層の子どもたち」を生むことになったとして、意欲格差社会（インセンティブ・ディバイド）の問題を指摘した⁴。

この指摘を受けて拙者は、学習意欲の問題と親の教育意識との関連を、「中流意識」を糸口にして「教育の階層化」について検討した⁵。バブル崩壊以前に日本人の約9割が「中流意識」をもっていたが、近年「中流意識」をもつ親のなかで、「学歴のメリットを自明のものとし、教育意識が高く、それゆえ子どもに対する教育への投資を続け、社会的に高い地位を維持することを求める階層」と、「学歴に対するメリットの意味もたず、教育への投資も行わず、子どもに対する教育意識の低い階層」とに分化しつつあることを指摘し、親の教育意識の格

差が子どもの教育達成に影響を及ぼすことを確認した⁶。

親の教育意識が子どもに与える影響に関して、特に母親の教育意識が子どもの教育達成に影響を及ぼすことを、近年の研究が明らかにしている。この動きについては拙稿において整理したが、ここで改めて確認していきたい⁷。

本田由紀は母親の子育て意識や学歴が子どもの学力や学歴に与える影響について、小学校高学年の子どもをもつ最終学歴が中学校卒業から大学院修了までの39名の母親への聞き取り調査と内閣府による「青少年の社会的自立に関する意識調査」データをもとに分析を行っている⁸。母親への聞き取り調査では、塾・おけいごとなどの学校外の教育や活動、家庭内での母親の子どもへの対し方、子育てやしつけの方針、学校との関係などについて分析し、通塾密度（時間・日数）と家庭学習時間については明確な差異があり、母親学歴が高いほど量的に多く、塾以外の習い事の密度、読書・娯楽などのルール・習慣については高学歴層の方がやや緻密さの度合いの高い配慮をし、そして子育ての方針や子どもに期待する将来像、母親の目から見た子どもの性格やストレス状態について学歴により質的な違いがあることなどを明らかにしている⁹。さらに、学歴によって上記のような明確な格差や質的相違が存在する一方、それぞれの母親による「家庭教育」には「格差と共通性」が併存しており、子どもへの気遣いや配慮に対して同じ前提を土台とした共通性をもつと指摘しながらも、配慮の度合いや具体的な行動に関して、個々の母親の持つ経済的、時間的資源や母親自身による経験や蓄積した知識や考え方、感じ方といった文化的資源などの諸資源には「否定できない違い」があるとし、母親の学歴が母親自身の教育意識や子どもの教育達成に影響を及ぼすと述べている¹⁰。内閣府の調査では、母親が、自身の子どもに対して小学生時点で行った6項目の子育て態度を、成績や塾、習い事、生活習慣などに力点を置く「きっちり」子育てと外での遊びや多様な体験、子どもの希望を受け入れることなどを重視する「のびのび」子育てに分類して母親の学歴ごとに分析したところ、母親学歴に加え家庭の社会階層が高いほど母親はそれぞれに力を入れるが、より「きっちり」した子育ての方に比重をおく傾向があることを指摘している。さらに、子どもの最終学歴に直接影響を与えるものとして家庭の社会階層と中学3年生時点の成績をあげ、中3時成績が小学生の頃の母親による「きっちり」した子育てがより強い影響を与えることを見だし、母親の子育てが子どもの将来にも強い影響を与えることを示唆した¹¹。

本田と同様、母親学歴について分析しているのが吉川徹である。吉川は、母親が大卒か非大卒かどうか、大学受験に対する高校生の学習意欲や学習時間を決定しているとして、子育てを担う母親の学歴が子どもの教育に大きな力を発揮しているとのべている。それは、母親が大学卒の学歴だと、子どもの学歴が母親の学歴を下回らないという動機づけが働き、子どもに対して大学進学を強く希望するからだとしている。そして、大卒・短大卒の母親が

3分の1を超え、子どもの進学率が50%を超える現在、大卒が再生産される家族と非大卒が再生産される家族との間に「学歴分断線」がしかれて親の学歴が再生産され、学歴が固定化する学歴分断社会が生じており、先述の荻谷が指摘したインセンティブ・ディバイドが起こっていると指摘している¹²。

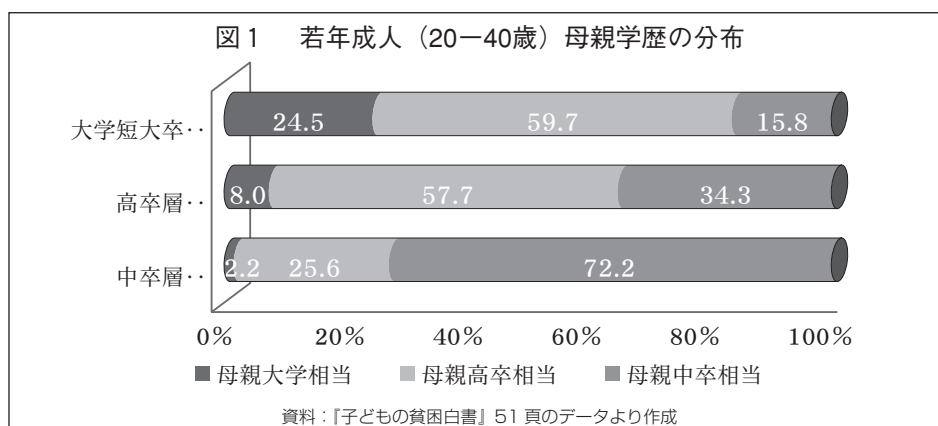
以上のように、母親の子育て意識が、子どもの学歴に直接的な影響を及ぼすことをみてきたが、拙者はその要因として、子どもを中心とする家族愛にもとづき、男女の性別役割分業を強く志向する近代家族の意識の普及をあげた。つまり、育児や子育てを任された母親が子どもの将来に対して大きな責任を負わされたことで、母親の影響が、子どもへの意識や配慮に強く作用し、子育ての質にも反映するからである。そして高学歴の母親ほど、自らの経験によって獲得した文化的資源が子どもの学歴や就職に対してプラスの作用で影響し、学歴を含め子どもの世代へと再生産される。他方、親の子どもに対する期待の低さ、関心のなさは、マイナスに作用し、子どもの学習低下に対して容易に影響を及ぼす¹³。

子どもの学歴に影響を及ぼす要因のなかでも、母親学歴の与える要因について概観してきた。そこで、次節では拙者が実施した調査をもとに、母親学歴と子どもの学歴の関係について検討したい。

3. アンケート調査の内容と結果

今回、母親学歴と子どもの学歴の関係について検討するうえでの予備調査として、冒頭でのべたとおり、都内の大学に在籍する大学生を対象に、母親学歴とその母親から受けたしつけや関わりについてアンケート調査を実施した。アンケートを実施した大学は、拙者が非常勤講師で勤める都内の私立大学で、対象の学生は拙者が担当する「教育原理」の受講者である。2011年12月にアンケートを実施し、55名より回答をえた。

今回のアンケート調査の目的は2点ある。1点目は母親学歴と子どもの学歴との関係、2点目は子どもの学歴と母親のしつけ・子育ての関係について検討することである。1点目については、大学生の母親の学歴がどのように分布しているのかを検討することになるが、その目安として、吉川による分析を参考にする。これは、吉川が2005年のSSM（社会階層と社会移動全国調査）調査データから分析したものである（図1）。このデータの20～40歳は、1965～85年生まれにあたり、冒頭の進学率でみたように、大学進学率が急速に上昇した時期に該当する。そして、こうした時代状況を考慮に入れる必要はあるものの、大学短大卒層の約4分の1が母親も大学相当の学歴であり、一方高卒層は3分の1強が中学校卒業である。そして中卒については、母親の学歴のうち、集団の母数は少ないとはいえ大学相当がわずか2.2%（2名）なのに対して、中卒相当が7割を超えており、高い再生産を示している。前節でみたように母親学歴が子どもの学歴に影響を与えることが分かる。今回のアンケートに関しては、この図のうち、大学短大卒層を目安に検討することとなる。



2点目は子どもの学歴と母親のしつけ・子育ての関係についてであるが、この点は前節の本田の「6項目の子育て態度」を参考にしている。本田の分析は子育て態度を「きっちり」と「のびのび」とに分類したが、拙者は2つの分類でいえば「きっちり」に該当する5つの項目を作成し、その実施の有無（3段階）で回答を求めた。では、それぞれについて検討していきたい。

1点目の母親学歴と子どもの学歴との関係については、次のような結果となった（表1）。学生の母親の学歴については、大卒と短大合わせて34名（61.9%）に達した。上記のSSM調査と比べて、大学・短期大学を卒業した母親がかなり多く、一方で中卒がわずか1名であった。今回のアンケートでは、進学した高校についても回答を求めている。進学校1（大半の生徒が大学進学）、進学校2（3分の2が大学進学）、中堅校（半分が大学進学）と設定し、該当するものを回答してもらったところ、進学校1を選択した学生が合わせて40名（72.7%）にのぼり、そのうち学歴が大卒・短期大学卒の母親が26名（47.2%）であった。この大学に進学する学生の多くが、進学率の高い高校より進学しているが、前節でみたように、母親の高い学歴が学生の学歴に反映しているといえる。参考として、父親の学歴（表2）を載せたが、大学院修了・大学卒で母親と同数の34名であった。

表1 母親の学歴

母親の学歴	人数	全体比
大卒	25	45.5%
短大卒	9	16.4%
専門学校卒	6	10.9%
高卒	14	25.5%
中卒	1	1.8%

表2 父親の学歴

父親の学歴	人数	全体比
大学院	2	3.6%
大卒	32	58.2%
高専卒	1	1.8%
専門学校卒	1	1.8%
高卒	15	27.3%
中卒	2	3.6%
不明	2	3.6%

次に2点目の子どもの学歴と母親のしつけ・子育ての関係について検討する。先に述べたように、ここでは以下の5項目について、三者択一で回答を求めた。

選択肢	1	2	3
①母親から勉強するように言われた	よく言われた	時々言われた	言われなかった
②母親に勉強を見てもらった	もらった	時々もらった	もらわなかった
③母親から大学に進学するように言われた	よく言われた	多少言われた	言われなかった
④母親はしつけに厳しい	厳しい	まあまあ厳しい	厳しくない
⑤母親は読書をする	よくする	時々する	ほとんどない

※表3～7の「選択肢」の番号が上記1～3に対応。また表3～7の「選択肢」1～3以下の数は人数

項目については、本田のいう「きっちり」というよりは、「しっかり」という表現が適切のように思われるので、「しっかり」しつけや子育てをされたかどうかを、母親学歴別にみていきたい。

表3の「①母親から勉強するように言われた」に関しては、「よく言われた」「時々言われた」について、大卒・短大卒が26名にのぼり大卒・短大卒の母親の72.2%の割合となり、「言われなかった」と比べると約3倍であったが、高卒については「よく言われた」「時々言われた」が高卒の親のなかの割合では多かった。

	選択肢		
	1	2	3
母親学歴・大卒	8	13	4
母親学歴・短大卒	2	3	4
母親学歴・専門学校卒	0	4	1
母親学歴・高卒	5	3	6
母親学歴・中卒	0	0	1

表4「②母親に勉強を見てもらった」に関しては、「もらった」「時々もらった」について、大卒の親の半数が該当する一方、短大卒は大卒に比べて大幅に少なかった。一方、高卒の母親については、大卒には及ばないものの、4割強の母親が該当した。

	選択肢		
	1	2	3
母親学歴・大卒	3	10	12
母親学歴・短大卒	1	1	7
母親学歴・専門学校卒	0	1	5
母親学歴・高卒	1	5	8
母親学歴・中卒	0	0	1

表5「③母親から大学に進学するように言われた」に関しては、「よく言われた」「多少言われた」について、大卒、短大卒の母親を合わせて約3分の2が該当するが、大変興味深い結果として、高卒の母親の割合もほぼ同様となった。この点については、父親の学歴との相関をみる必要があると思われるが、大卒学歴を獲得してほしいと

	選択肢		
	1	2	3
母親学歴・大卒	11	7	7
母親学歴・短大卒	3	2	4
母親学歴・専門学校卒	2	0	4
母親学歴・高卒	7	2	5
母親学歴・中卒	0	0	1

いう親の期待が反映されている可能性が想定される。

表6「④母親はしつけに厳しい」に関しては、各学歴で「厳しい」よりは「まあまあ厳しい」のほうが多い傾向がみられるが、両者を合わせた割合については、大卒・短大卒と高卒の間でそれほど大きな違いはみられなかった。

最後の表7「⑤母親は読書をする」に関しては、上の4つとは明らかに異なる結果となった。大卒の母親の「よくする」「時々する」の割合は8割に達し、他の学歴を大きくしのぐものとなった。5つの項目のなかで、唯一母親から直接働きかけるものではないが、読書習慣については一般的にヒドゥン・カリキュラムとして子どもに作用することが知られている。その点で、母親の態度が子どもに反映したことが想定される。

以上、5つの項目と母親学歴との関係を概観した。大卒・短大卒の母親が他の学歴の母親と比べて、子どもへの教育意識が高いであろうということが想定されたが、①と②についてはやや高く、③、④については明らかな違いはみられなかった。ただ、⑤に関しては、大卒とそれ以外の学歴との間にある程度の違いがみられた。この点に関しては、母親のもつ文化的資源が子どもの学歴に影響を与える可能性も想定される。

4. 今後の課題

母親の学歴と子どもの学歴との関係について検討してきたが、最後に本稿の「3. アンケート調査の内容と結果」について省察し、今後の課題についてあげておきたい。今回実施したアンケート調査は、母親学歴と子ども学歴との関係を検証するための予備調査として実施したが、いくつかの問題点が指摘できる。1つ目は、調査人数と対象の問題である。55名は統計上の妥当性に問題があり、また1大学の1講義の学生が対象であることから、データに関してばらつきが小さくなったことは否定できない。今後は、調査対象の人数を増やし、複数の大学のデータを使用する必要がある。2つ目は、質問項目の妥当性である。今回は「しっかり」しつけ・子育ての項目のみであったが、比較検討可能な項目設定が必要と考える。さらに今回の5項目が母親学歴と子ども学歴との関係を考察するうえで、十分な妥当性があったとはいえない。今回のアンケート結果を踏まえて、より妥当性のある項目の作成を検討していきたい。3つ目には、データ分析の手法である。前節でのアンケート調査の検討は、

	選択肢		
	1	2	3
母親学歴・大卒	5	13	7
母親学歴・短大卒	2	5	2
母親学歴・専門学校卒	0	4	2
母親学歴・高卒	5	5	4
母親学歴・中卒	0	1	0

	選択肢		
	1	2	3
母親学歴・大卒	12	8	5
母親学歴・短大卒	2	2	5
母親学歴・専門学校卒	2	2	2
母親学歴・高卒	2	6	6
母親学歴・中卒	0	1	0

各項目の回答数にのみ依拠した方法に終始した。次回の分析では適切なデータ処理をして、結果の信頼性を高めていきたい。

今回の考察では、多くの問題点があったが、今後に向けての課題をえることができたことは、大きな成果であった。次稿では、本稿をたたき台として、母親学歴と子ども学歴の相関について、十分に検証したい。

— 註 —

- 1 文部科学省「学校基本調査」高等学校等への進学率より。数値は中学校卒業者のうち、高等学校の本科・別科及び高等専門学校への進学者の割合を示す。
- 2 東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター「高校生の進路追跡調査 第1次報告書」2007,69頁
- 3 厚生労働省「平成22年度 国民生活基礎調査の概況」2011,13頁
- 4 荻谷剛彦『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲拡大社会へ』有信堂高文社, 2001,218—220頁。
- 5 新田司「中流意識における「教育の階層化」」『教育研究』（青山学院大学教育学会紀要）第47号,2003
- 6 同上76—77頁
- 7 新田司「戦後日本の近代家族意識と教育格差との関係—母親の教育意識と教育格差との関連について—」池田稔記念論集編集委員会編『教育人間科学の探究』学文社,2011
- 8 本田由紀『「家庭教育」の隘路—子育てに脅迫される母親たち—』勁草書房,2008
- 9 同上,115—116頁
- 10 同上,117—118頁
- 11 同上,186—187頁
- 12 吉川徹『学歴分断社会』ちくま新書,2009,142—146,168頁
- 13 新田,2011,87—88頁